

住所 〒060-8711 北海道新聞生活部(郵便の宛先は住所不要です)

電話 011-210-5605  
ファクス 011-210-5607

電子メール seikatsu@hokkaido-np.co.jp  
ツイッター @doshin\_seikatsu



私の父方の祖母は、昨年10月17日に95歳で亡くなりました。決して健康体の人ではなかったのですが、孫たちと出かけるのが大好きでした。私や弟も、いろいろと連れ回して百舌が原公園に3人で行ったり、祖父も交えて4人で函館や青森に旅行したり。この時、私は忘れ物をして当時70

祖母の思い出



歳の祖父を走らせてしまい、今でも反省しきりです。最も印象に残っているのは、私が小学6年、弟が3年の夏休みに、札幌の「ていねい」からハンカチを出したり入れたり、引き出しにしまったの「プル」に1週間、連れて行ってもらったこと。弟がなかなかプルから出たが、祖母も大変でした。後になつて、祖母に会うたびに、笑い話になりました。

本間 裕美(43歳・主婦)

—札幌市清田区

投稿は女性向け、600字で。郵便、ファクスは原稿用紙を使い、生活部「いずみ」係、電子メールはizumi@hokkaido-np.co.jpへ。題、住所、氏名(ふりがなも)、年齢、職業、郵便・電話番号を明記。趣旨を損なわずに加筆することがあります。原稿はお返ししません。掲載分は電子版とデータベースに収録します。

自慢の豚肉料理を紹介

わたしの一品

読者のレシビから

「きょうの一品」欄のスペースで毎月下旬、読者のレシビを紹介する「わたしの一品」。9月のお題は「わが家の豚肉料理」です。うまみと滋養あふれる豚肉は冬の前に体力を付ける理想の食材で、道民も大好きです。

応募レシビの中から、《1》豚肉のから揚げリンゴソース(札幌市北区・五十嵐由さん)《2》豚キムチスープ(札幌市東区・佐藤ゆうさん)《3》ニラと豚ひき肉のあんかけレタス包み(恵庭市・触沢文さん)《4》豚こま肉団子のトマトシチュー(岩見沢市・中村亜希恵さん)一の4点を選者しました。

審査基準は材料が手に入りやすい、鮮明なカラー写真付き、手順通りに作ればおいしい—などです。月曜から土曜までの間にカラー紙面を選んで掲載します。

■住まいの情報をミナ 1「安心して住み続けるためのワンポイントリフォーム」 25日午後1時半〜3時半、かどろ2・7(札幌市中央区北2西)。講師は恵和建築設計事務所代表の山本明恵さん。定員80人。無料。申し込み、問い合わせは認定NPO法人シーズネットへ。1-717-6001へ。 ■北海道がんセンター 医療フェスタ(札幌) 30日午前10時〜午後3時、北海道がんセンター(札幌市白石区菊水4の無料。直接会場へ。問い合わせは011-811-8111へ。 ■NPO法人ホスピス ケア研究会・札幌活動委員会「がんを知って歩む会」(全4日間) 30日と10月7、14、21日の午後1時半から2時、東札幌病院(札幌市白石区東札幌3の3)。がん患者や家族が、共に学び、気持ちを交流し、病気のつきあい方を見つめ、前向きに生活することを目指す会。各日のテーマは①がんについて学ぶ②毎日の健康状態に

進路や職業考える力を

学校に広がる民間キャリア教育

9月中旬、札幌市豊平区の小らば台小の6年生の2教室で「NPO法人シーズネット」(神奈川)によるキャリア教育プログラム「すきなもののピンゴ&お仕事マップ」が行われていた。「授業中、おしゃべりすると怒られるけど、おしゃべりが好きだと役に立つこともあるよね。司会役の女性スタッフが話しかけると、子どもたちは「アナウンサー」「落語家」と矢継ぎ早に答えた。

黒板の中央に書かれた「おしゃべり」の文字の周りに、スタッフが答えをどんどん書き込む。子どもたちがひらめいた職業を口にし、黒板はおしゃべりに関連する職業で埋め尽くされた。子どもは職業名を挙げてもらうことで、仕事の視野が広がります。同法人理事の下川原彩さん(29)「千歳市在住」は語る。

このプログラムは、同法人

ゲームや対話で興味引き出す



ゲーム方式で、自分のやりたいことや興味があることを考える小らば台小の子どもたち。中央はサポートするスタッフ

人が2000年から、全国の小中、高校などで実施している。子どもたちは4人1組になり、ゲーム形式で互いの好きなものや関心があるものを知ったり、おしゃべりに関連する職業名を出し合う。最後は、自分がわくわくする仕事、とその理由を紙に書く。参加した今野千佳さん(11)は「自分が楽しんでできる仕事は何かを考えることができた。ほんやり」と思い描いていたことが、はっきりとした気がするとうれしそうに話した。

キャリア教育 児童生徒が職業観などを身に付け、将来の夢や社会で活躍する自分の姿を具体的にイメージしながら進路を選択・決定できる

能力や意欲を育む教育。文部科学省は2008年に改定した小中学校の学習指導要領にキャリア教育が目標・目標や内容を盛り込んでいる。 教諭の吉田夢望さん(呼びかけて表現した。吉田さんは「近い将来、自分の職業について考えることになり、職業の知識が少ないうちから、仕事について考える機会をつくりたい」と語る。

同法人が企画したキャリア教育のプログラムは研修を積んだボランティアスタッフがサポート3200人。これまでに、全国約3200の小中、高校などで実施してきた。下川原さんは「子どもたちは周りの大人の目を気にして、将来はこうしなくて、という思いに縛られるがち。このプログラムを、本当にやりたいことに気付き、何かを始める原動力にしてほしい」と強調する。

人口減や核家族化で子どもたちと、親戚や地域の大人との関わりが薄れる中、周囲の大人と触れ合いながら、自分の将来を描き取り組むは年々注目されている。札幌市のNPO法人「いずみ」は休みました。

同法人の江口彰代表は「学生生活と膝をつき合わせて語らうことで、生徒たちの本音が見えてくる。プログラムを学校の進路指導などに生かしてほしい」としている。